ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

【Ｎコード】

Ｎ１０００Ｚ

【作者名】

ｋａｉ

【あらすじ】

雛見沢に引っ越す前のレナの物語です。レナがこれまでの歴史を語る！

終わりの始まり

主人公　　竜宮レナ（りゅうぐうれな）

主人公の中学の友達
瀬上奈菜（せがみなな）

side　レナ

これは、レナが圭一（友達）君達と出会う前のこと。茨城に引っ越して中学3年生になった夏休み前日、レナは学校の帰り道はいつも友達と一緒に帰っていた。

「ねえ、レイナ（昔のレナの名前）ちゃん今度の休みどこかに出かけようよ」

この子の名前は、瀬上奈菜（せがみなな）ちゃん小学生の頃からの親友。転校して来たレナを歓迎してくれた。

「うん～どこに行く～？あっそうだ！最近できたばかりのケーキ屋さんがあるんだよ～今度そこ行かない？」

「そうなの！？行く行く～」

奈菜ちゃんは、目を輝かせて言った。奈菜ちゃんは、ケーキが大好きでよく一緒に甘い物の話をしていた。

「はう～かぁいいよ～お持ち帰りィィィィィ！！」

「きゃっ！！もうレイナちゃん～」

奈菜ちゃんは照れながら言った。そして、奈菜ちゃんと別れてまっすぐ家に帰って今日のことをママとパパに話した。２人はレナの話を楽しそうに聞いてくれた。ママが言った

「レイナは、本当にいい友達に恵まれたわね」

「うん！！勉強も教えてくれるし困ったときは、助けてくれるし大好き！！」

ママは、微笑んで言った

「奈菜ちゃんを大切にしてあげてね」

「うん！！」

こうして1日が過ぎていった。この後どうなるのか、レナも分からなった

終わりの始まり（後書き）

勝手ながら、レナのストーリーを書かせていただきました。暖かい目で見てやってください

楽しく（前書き）

訂正が１つあります。１話でお父さんとお母さんなのにパパとママにしてしまったことです。すみません

楽しく

朝、目が覚めて想い浮かぶこと

「あれは一体なんだったのだろう？」

「よく見えなかったけど誰かいた」

とりあえずベットから出て顔を荒い、髪を整えて、歯磨きをしたそしてお母さんとお父さんのいる部屋へ行って
2人に

「おはよう」

と言った
そしたら、

「おはよう」

と2人は言った

「良く眠れたか？」

とお父さんが言った

「うん！！よく眠れたおまけに奈菜ちゃんと旅行に行く夢をみたんだよ！！」

「そうか、良かったな」

その時、お母さんが料理を運んできた
そして、こう言った

「夢を見るのはいいけどちゃんと現実も見てよね」

「むうぅぅぅ！！ちゃんと見てるよ！！」

その瞬間、どっと大きな笑い声であふれかえった

朝ごはんを食べ終わって奈菜ちゃんに電話をした

「今日、プールに行かないかな、かな？」

「うん、行く」

「あっそうだ！！今日ね奈菜ちゃんの夢を見たんだよ～」

「そうなの！？どんな夢？」

「えーとね、奈菜ちゃんとレナで温泉旅行してる夢をみたの！！浴衣姿の奈菜ちゃんかあぃぃかったな～お持ち帰りぃぃぃしたかったな～」

「そうなんだ・・・」

「じゃあ、９時に現地集合するね」

「うん、じゃあね」

「じゃあね」

急いでプールの用意をした。そして、自転車に乗って集合場所に行

った
集合場所に行ってみると奈菜ちゃんが待っていた

「ごめん、待った～」

「ううん今、来たところ」

「じゃ、行こっか」

「うん」

レナと奈菜ちゃんが水着に着替えた

「はうぅぅぅ！！奈菜ちゃんかあぃぃぃよ～お持ち帰りぃぃぃ！！」

「レイナちゃんやめてよ～もう」

こうして楽しい1日は過ぎていった

その翌日、警察から電話があった

奈菜ちゃんの家族が失

踪したという知らせだった

楽しく（後書き）

本当にすみませんこちらの都合でいつ投稿するかわかりませんので、
ご了承ください

別れ

「そっそんな、奈菜ちゃんの家族が失踪するなんて」

「はい、詳しくはまだ分かりませんが、必ずご家族を探し出します」

この後、急いで奈菜ちゃんに電話をした

「奈菜ちゃん・・・大丈夫かな、かな？」

「う・・うん」

奈菜ちゃんの声は震えていた

「大丈夫、きっと見つかるよ！！」

「うん」

レナは、必死に奈菜ちゃんを慰めた

「何かあったら、電話して」

「うん、ありがとう」

「じゃあね」

「じゃあね」

電話を切りレナは思った

「神様どうか奈菜ちゃんの家族を助けて！！」

奈菜ちゃんの家族がいなくなってもう夏休みが終わろうとしていたある日1本の電話があった

「瀬上さんのご家族が遺体で発見されました」

ショックだった、でも、レナ以上にショックをうけたのは、奈菜ちゃんだったと思う
奈菜ちゃんは、夏休みが終わっても学校に来なかった
後で聞いた話だけど、奈菜ちゃんの家族は、借金があってレナが奈

菜ちゃんとプールに行った時に川で自殺をしたそうなの
ある日、何か大きな声が聞こえて目が覚めた
声が聞こえてくる方へ行ってみると
お父さんとお母さんが何か喧嘩しているようだった

「おい、この男はどこのどいつだ！！」

「違うわよ！！この人は仕事で一緒なだけ！！」

「だったらなんだこの写真は！！」

「普通仕事が一緒なだけで腕を組むか？」

「誤解よ！」

「もうやめて、やめて！！」

レナは心から、思った
そんな毎日が続いたある日、奈菜ちゃんが登校してきた
レナは、うれしさと不安が同時にきた

「奈菜ちゃん・・・」

「おはよう！レイナちゃん」

「うん！！おはよう！！」

奈菜ちゃんは元気そうに振舞っていたが、本当はまだ辛いのだと分かった
なるべくあの時のことをいわないように気をつけた
この時、奈菜ちゃんが来てくれてとっても助かった
なぜなら、お父さんとお母さんが喧嘩をしてるからだった

「最近、お父さんとお母さんが喧嘩してるのレイナどうしたらいいのかな、かな？」

「うーん、ここはやっぱりレイナちゃんが止めに入るしかないよ」

「でも、大丈夫かな、かな？」

「大丈夫だよ！！」

「ありがとう元気が出た！！」

「どういたしまして」

別れ（後書き）

次から、もう少し文を増やしてみたいと思います

夢

目が覚めた時、まだ夜の3時だった、その瞬間上から誰かがレナを見ていた。暗くてよく見えなかったけどレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰りなさい」

これを聞くとレナは眠ってしまった
今度起きたときは、朝だった

「あれは、一体なんだったのだろう」

「前にもこんなことがあったような・・・」

そんなことを想いながらもレナは着替えて学校に行く準備をした
そしたら、お母さんとお父さんの喧嘩が始まった
喧嘩の内容はいつも同じお母さんが浮気をしてるかしてないかだった
レナは、奈菜ちゃんに言われた通りにこう言った

「喧嘩はやめてよ！！レイナは、お母さんとお父さんが喧嘩してる所なんてみたくないよ！！！」

2人は、黙り込んだ

「ごめんな、レイナもうしないよ」

「お母さん達が悪かったわ」

2人は、色々反省したような顔だった

「ううん、分かってくれればいいよ」

「じゃ、学校に行ってくるね」

「レイナ朝ごはんは？」

「じゃ、行ってきまーす！！」

「あっ！！もう」

レナは、がんばって走った時間まで残り3分、何とか校門に入って下駄箱に靴を入れてシューズに履き替え、ダッシュで走って行き教室に着いた。教室に入って椅子に座った瞬間にチャイムが鳴り出し

た。

「危なかった～」

「レイナちゃん珍しいねこんなギリギリに来るなんて」

奈菜ちゃんは、レナの前の席で授業中によく話しては、先生に怒られていた

「うん、ちょっとお父さんとお母さんを叱ったら遅れちゃって」

「そうなんだ、良かったね、言いたいこと言えて」

「うん！！これも奈菜ちゃんのおかげだよ、ありがとう」

「わたしは、友達として当然のことをやっただけだよ」

その瞬間、安心したせいかレナからお腹がぐうぅぅぅと鳴った

みんな、唖然としてレナの方を見ていた

レナは、顔がカアァァァと熱くなるのを感じた

「そういえば、朝何も食べてなかったんだっけ」

「いつものレイナちゃんだったらかあぃぃよ～お持ち帰りぃぃぃて言うのにね」

「それを、言わないで～」

授業中にもお腹の音がなるたびにみんながレナの方を見ていたその日の帰り奈菜ちゃんと一緒に今日の話をしてた

「もう、本当に恥ずかしかったよ～」

「うん、すごい鳴ってたねもう笑いをこらえるのに必死だった」

「むぅぅぅ！！奈菜ちゃんのイジワル～」

「うそだよ～」

しばらくこんなことを話して奈菜ちゃんと別れたそれで、空を見てみたら夕日がすごくきれいだった。まるで真っ赤な血みたいに

夢（後書き）

徹夜してつくりました。おかしな点等がありましたら、コメントください

悪夢

１０月になってもう学校では、衣替えの季節がやってきた。ある日、学校から帰る途中奈菜ちゃんがレナにある提案をしてきた。

「ねえレイナちゃん、今度の土曜日紅葉見に行かない？」

レナは、ビックリした。いつも出かける時はレナが誘うのに今回は、奈菜ちゃんから誘ってきたの

「うん！！行く！！でも珍しいね奈菜ちゃんから誘ってくるなんて」

「実は、今年の紅葉とても綺麗らしいからレイナちゃんと一緒に見たいな～と思って」

「そうなんだ」

「じゃあ、わたし家ここだから」

「うん、じゃあね」

「バイバイ」

レナの家は、もう少し先だから今まであったことを、思いだしていた。奈菜ちゃんの家族が自殺したことや、お母さんとお父さんが喧嘩していたことや、夜に見るあの夢など。その時、後ろから足音が聞こえた。「ひた、ひた」とまるで裸足で道を歩いているかのような音がした。振りかってみても、誰もいなかった。気のせいだと思いまた歩きだしたその時、また「ひた、ひた」と音がしてまた振り返ってみた。でも、誰もいなかった怖くなったレナは全速力で走った何度も転びかけたけど走るのをやめなかった。ようやく家が見えてすぐに、家の中に入った。そして、自分の部屋へ行きベットに倒れこんだ。
そして、ようやく出た一言は、

「なんだったの今の？」

その時、

「おかえり」

お父さんだった

「うん、ただいま」

「どうしたレイナ顔色が悪いぞ」

「大丈夫、なんでもないよ」

「そうか」

お父さんは、あんなふうに言ってるけど心配そうにレナを見ていたすぐにレナは、お風呂に入り夕飯も食べて寝ようとしていた。けれど、どうしても今日のことが忘れられなかった。何時間くらいたったのだろう。時計を見たら夜の3時になっていた。その時上から黒い影みたいなものが出てきてレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰るのです」

「いや・・・いやーーーーーーーー！！！」

レナは、何がなんだか分からなくなっていた
その瞬間、

「どうしたレイナ！！」

お父さんとお母さんが来て言った

「そこに、黒い影がいるの・・・」

「何もいないじゃない」

気づいたら黒い影はいなくなっていた

「さっきまでここにいたよ！！」

「レイナはきっと疲れているのよ。ちゃんと寝て疲れをとりなさい」

「・・・うん」

「おやすみ」

「・・・おやすみ」

この悪夢がレナの人生を大きく変えることなどレナも分からなかった

悪夢（後書き）

この話も、徹夜で書きました。何かアドバイスをもらえたら幸いです

助け

奈菜ｓｉｄｅ

最近、レイナちゃんの様子がおかしい。話かけてもあまり反応がないし、なんていうか・・・心配事があるみたいな顔をしていた。ある日、学校の帰り道勇気を持って聞いてみた。

「レイナちゃん最近元気ないけど困り事とかない？」

「うん・・・大丈夫だよ」

レイナちゃんは笑いながら言ったがそれは、作り笑いだとすぐに分かった。

「ウソだよね」

「ウソじゃないよ」

レイナちゃんは、ちょっと強い口調で言った。

「レイナちゃん・・・困り事があるとすぐ下見るのんだよ知ってた？」

レイナちゃんは、焦っていた。

「レイナちゃん・・・わたし達友達でしょ？」

レイナちゃんは、涙を流しながら言った。

「ご・・・ごめんね、心配かけたくなかったから」

「ううん、いいよでも、わたし達友達じゃない悩んでることがあるならわたしに、相談してもいいんだよ」

わたしは、レイナちゃんに笑いかけて言った。そして、何があったのか全て言ってくれた。レイナちゃんが。変な足音につきまとわれていることや、夜な夜な黒い影が現れてレイナちゃんに雛見沢という場所に帰れと言われていること。わたしは、全て信じた。

「じゃあ、その事を調べてくるよ！」

「調べる・・・って、どうやって？」

「図書館で調べるんだよその方が、何か情報があるかもしれないし」

「奈菜ちゃんは強いんだね」

「ううん、ただわたしは困ってる友達を助けたいだけなの」

「ありがとう」

レイナちゃんは、思いっきり笑った。

「どういたしまして」

わたしは、誰かの役に立てたことが、何よりも嬉しかった

助け（後書き）

すみません・・・ネタがなかったので奈菜ｓｉｄｅでやらせていただきました。レナファンの方々申し訳ありません

真相

レナｓｉｄｅ

レナは、奈菜ちゃんのおかげで吹っ切れた。困った事は、友達に言う事が大切なのだと。
奈菜ちゃんが、調べてくると言って何日かした学校の帰り道、奈菜ちゃんが暗い顔でレナの所に来てこう言った。

「調べてきたよ・・・なかなか情報がなくて何日もかかったけど」

奈菜ちゃんは、これまでレナにも見たことのない表情で言った。

「ありがとう、で、どんな事が分かったの？」

「うん、実は前黒い影がレイナちゃんに「雛見沢に帰れ」って言ってたんだよね？」

「うん・・・そうだけど」

「その影の正体が分かったの」

「え・・・誰なの？」

「・・・オヤシロ様」

一瞬レナは、奈菜ちゃんが何を言ってるか分からなかった。でも、すぐに理解した。
お父さんから聞いたことがある。オヤシロ様とは、雛見沢の守り神で禁忌をおかした者を祟りで殺すと呼ばれている。

「そ・・・そんな、じゃあなんでレナの所に来るの？」

「それは・・・レイナちゃんが雛見沢出身だからだよ」

「！？」

昔のレナは、雛見沢に住んでいることはまだ知らされていなかった。ただ、小さい頃、田んぼが多い所に住んでた覚えはあるけどあれが雛見沢なんてとても思わなかった。驚いてるレナをよそに奈菜ちゃんは続けた。

「本に書いてあったけど、オヤシロ様はあまり雛見沢出身の人を外に出したくないらしいの、そして、外に出たとしてもいられる時間も決まってるの」

ショックだった。レナは震える声で奈菜ちゃんに聞いた。

「ど・・・どれくらい？」

「・・・8年」

え？待って・・・レナがここに来たのは7歳の頃、ということは今年で・・・8年！！

「何かの間違いだよね、ね？」

「・・・分かんないよでも、オヤシロ様がレイナちゃんの所に来た理由はそれなんじゃないかな」

「分かった、調べてくれてありがとね」

「・・・うん」

レナは、奈菜ちゃんと別れた後、急いで家に帰ってお父さんとお母さんにレナが雛見沢出身か聞いた。そしたら、お父さんが言った。

「おお、よく知ってるな～確かにレイナは雛見沢出身だ。でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「・・・何でもない」

レナは、自分の部屋へ行きベットに倒れこんで思いっきり叫んだ

真相（後書き）

かなりがんばりました！！

それから

レナは叫び続け、疲れて寝てしまった。朝が来た・・・いつもなら楽しみなはずの学校があまり楽しくなりそうにもない。レナは、・・・泣いた。もうすぐお別れなんて嫌だよ・・・そう思いながらも学校に行く準備をした。そして、朝ごはんを食べて学校に行った。校門に入ろうとしたその時、そこには奈菜ちゃんがいた。奈菜ちゃんも気づいてレナの方を見た。そして、奈菜ちゃんは、レナの所に来て

「おはよう」

と笑顔で言った・・・奈菜ちゃんの笑顔はすぐに作り笑顔だと分かった。なぜなら奈菜ちゃんの顔がやつれてたから。奈菜ちゃんはレナのために泣いてくれてたんだね・・・だからレナも

「おはよう」

と言った

「良い天気だね」

「そうだね・・・」

レナは、前々から気になっていた事があったそれは、「8年たったらどうなるか？」ということだった。それを、奈菜ちゃんに聞いてみた。そしたら、奈菜ちゃんは暗い顔でこう答えた。

「それは、雛見沢に戻されるんだよ・・・」

「どうやって？」

レナは、恐怖で震えながら言った

「それは・・・分からないよ」

奈菜ちゃんも恐怖で顔がゆがんでいた

「分かった・・・ごめんね嫌なこと言わせて」

「・・・ううん」

「じゃあ・・・行こっか」

「うん」

その日の学校の帰り道、奈菜ちゃんは色々と用があって一緒に帰れなくてレナが1人でいた時、お母さんを見かけた。とてもきれいな服を着てた。何をやってたんだろう・・・それから数日がたってお母さんに呼び出された。

「何かな～お母さん、用って」

お母さんは、とてもうれしそうな顔でこう言った。

「あのね、お母さん近い時期にレイナちゃんに会わせたい人がいるの」

この時、まさかこんなことになるなんてレナは予想もしていなかった

それから（後書き）

今回は、時間の都合で少ししかかけませんでした。申し訳ありません

愛

お母さんが会わせたい人がいるって言ってたけど誰なんだろう・・・そう思いながらもとうとうその日がやって来た。お母さんに待ち合わせの場所に連れて行かれた。そこには、タキシードを着た男の人で年は・・・30歳・・・くらいかな？その人はとても優しそうな人だった。男の人は、お母さんと何か話してからレナの方を見てこう言った。

「初めまして、レイナちゃん。ぼくは、加藤秋人（かとうあきひと）です。お母さんから色々聞いてるよ」

レナは色々戸惑いながらも

「は・・・初めまして」

どうしてお母さんは、この人と会わせたんだろ・・・レナはそう思った。その時、秋人おじさんが

「じゃあ、まず映画に行こうか」

と言った。秋人おじさんはレナとお母さんの手を握り映画へと連れて行かれた。恋愛ものの映画だった。レナは、泣きながらその映画を見て最後のシーンには・・・はう～恥ずかしくて言えないよ～そして、映画が終わり次は、お昼ご飯を食べた。それでデザートは・・・チョコレートパフェ！！おいしすぎてバクバク食べてしまった。それを見てお母さんは

「こら！レイナ！はしたないわよ」

と言った。そしたら秋人さんは

「いや、うますぎるからしょうがないんですよ～ぼくだってついバクバク食っちゃうんですから」

と言った。お昼ごはんが終わって色々な所を散歩した。そして、日が暮れて秋人おじさんと別れてお母さんと一緒に帰った。そして、お母さんが笑顔で言った。

「今日、楽しかったわね」

「うん！！」

レナも笑顔で言った。そして、お母さんは笑顔のままこう言った。

「今日のことは、お父さんには秘密ね」

「え、何で？」

「知らない人と一緒にいたらお父さんがやきもちやくから」

お母さんは、言った

「あっそうか！！うん分かった」

「約束よ」

「うん！！」

そう言って家に入った。今日の1日はこれでお終い。その翌日、お母さんに呼び出された。

「ちょっと外に出かけない？」

「別に・・・いいけど」

そして、レナとお母さんは、出かけて散歩してそこのカフェに寄った。レナは、またパフェを注文し食べようとした時にお母さんがこう言った。

「レイナちゃんは、秋人おじさんのこと好き？」

「うん、好きだよ」

「そっか～良かった～」

「お母さんね・・・妊娠してるの」

愛（後書き）

無理やり本編につなげた部分があるかもしれませんが、ご了承ください

情愛　前編

え・・・今なんて？

「お母さんね結婚するの」

やめて・・・・

「それでね」

やめて・・・・

「お母さんねお父さんとね」

やめて・・・・

「離婚するの」

頭が真っ白になった。この後お母さんが何を言ってるのか聞こえなかった。そして、話が終わり家に帰った。レナの部屋に入り・・・・泣いた・・・ひっそりと。翌日、学校でこのことを菜奈ちゃんに話した。

「何でこうなっちゃったのかな、かな？」

「わかんないけど、それはお父さんとお母さんが決めることでわたし達が決めることじゃないよ」

「うん、そうだね」

学校が終わった後、菜奈ちゃんとは一緒に帰らず急いで家に帰った。

「ただいま」

「おかえり」

お母さんがご機嫌で言った。お父さんを捨てておいて自分だけ幸せになろうて言うの？レナは思った・・・この人はもうお母さんじゃないと

情愛　前編（後書き）

すいません・・・時間の都合で少ししか書けませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1000z/

ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

2011年12月11日19時47分発行